

1. その時代的背景

東京家政学院短大 豊原 繁子
○井上 和子

1. 明治末年、諸井彩子夫人（当時32歳）が、駐独日本大使館員の夫君と共にベルリン滞在当時着用された洋装一組は、服装史上極めて貴重な資料である。このドレスは、ベルリン製で19世紀末から20世紀始めにかけて流行したS字形カーヴのシルエットを形成している。この曲線様式は、当時フランス、ベルギーを中心に西欧各国に盛んであった芸術運動アール・ヌーヴォーの装飾様式とも対応するものである。彩子夫人のドレスのつくられた当時の各国洋装について考察してみたい。

2. 当時の写真、美術資料、ならびに各国服装史、文化史、美術史等、当時の洋装に関する諸般の文献資料を参考とした。

3. 明治末期の女子洋装は、鹿鳴館時代の欧化政策による一時的流行現象と異なり、生活に定着する風俗として貴婦人の間に、また職業服として看護婦、女優等に採用された。この頃からわが国女子服装における洋装の定着化が始まるのであるが、彩子夫人着用当時の西欧諸国においても、ファッションはまだ大衆のものとならず、機能を第一とする近代服に対し、中世以来の女子服装美の理想型である細胴のシルエットを残照としてとどめ、人巧を極めた熟成の美を理想とした最後の時代であったことは、まことに興味深い。